



張虚靖と地祇?都法

著者	二階堂 善弘
雑誌名	関西大学文学論集
巻	54
号	3
ページ	217-230
発行年	2005-01-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/870

張虚靖と地祇鄴都法

二階堂 善弘

前 言

『道法会元』と『法海遺珠』(1)は北宋から明にかけての雷法の状況を伝える貴重な文献である。しかしその記述は体系的に整理されているとは言えず、一見、非常に蕪雑な印象を受ける。但し、ここには神霄各派の法術を始めとして、清微法・天心法・地祇法・鄴都法など様々な派の法術に関する記載があり、この 時期の雷法各派の状況を知るためには、非常に貴重な資料であると考えられる。

小論ではこれらの資料の中から、特に地祇法・鄴都法と呼ばれる系統の法術について取りあげ、第三十代天師とされる張虚靖との関連について考察するものである。

1. 1. 道教における冥界の神将

雷法は北宋の徽宗の頃に林靈素によって朝廷に持ち込まれ、発展した。その後北宋が亡びたため、林に対する評価はあまり良いものとは言えないが、それにしてもこの時期の道教の変革に関するその働きは認められるべきであろう。むしろ『道法会元』などでは、林靈素よりも、雷法を伝えた王文卿・張虚靖・薩守堅・白玉蟾といった祖師たちを重視する傾向がやや見られる。

雷法の經典においては、高位の神、或いは王文卿や張虚靖などの祖師が「主法」となり、「元帥」という一連の武神が呼び出され、「将班」または「帥将」として使役されるという形がよく見られる。しかしどちらかと言えば、その法術の実質的な主体であるのは、むしろ元帥神の方である。そのため多くの法術は、「某元帥秘法」「某元帥大法」などといった名称で呼ばれる。

二百六十八巻という大部の經典である『道法会元』の中で、地祇法や鄴都法はその最後の十数巻を占める。恐らく、「鄴都」すなわち地獄に関連するという性格のゆえに、最後部に配列されたものと推測される。

このような配列自体、中国の伝統的な「天地」の概念から来たものであることは容易に推察される。ただ恐らく、その考え方の基本的な来源となっているのは、より直接的には六朝期の『真靈位業図』(2)などに見られる序列観念であろう。

いま『真靈位業図』を見るに、その位階は七つに区分されており、最上位は上第一中位として、元始天尊を中心に多くの諸道君を配す。第二位には太上道君を中に据え、赤松子・西城王君・茅君・南嶽魏夫人などの仙人を列する。これに比して、最下である第七の階層には生前に功績のあった人物を配列する。

その七位の中心になるのは酆都北陰大帝であるが、これもまず太古の炎帝であるということになっている。そして周の文王と武王・斉の桓公・晋の文公・秦の始皇・漢の高祖・後漢の光武帝・魏の武帝・曹操・蜀の劉備といった帝王覇者に加え、召公奭や呉の季札などの賢者の名を列挙する。中でも孫堅・孫策・荀彧・孔融・郭嘉・曹洪・曹仁・徐庶・龐徳・何晏・公孫度・劉封・殷浩と、魏晋に活躍した人物の名が目立つ。ただこれらの人物はいかに生前に功績があったとはいえ、あくまで冥界の官吏としての役割しか与えられていないわけである。この他に史上の人物では、天上の第三位に列せられる黄帝・顓頊・堯・舜などの五帝や、孔子や顔回などといった比較的重要視されている人物もいないわけではないが、それにしても一般の仙人たちに比べると相対的に低い位置に在ると言わねばならない。

これは六朝期の道教における天地の秩序観念を示すものであろう。すなわち、生前功績のあった人物は神として封じられるものの、その地位は往々にして地獄の鬼官にすぎない。「道」との関わりが重要なわけである。五帝や孔子などですら、「道」との関わりは薄いと考えられているのだ。だから周の文王や秦の始皇帝といった、生前いかに功績があった人物でも、仙界の秩序から見れば冥界の官吏であることがふさわしいとされてしまう。

『道法会元』には夥しい数の「元帥」或いは「將軍」「天君」「靈官」と呼ばれる神が存在するが、その多くは抽象化されたものである。例えば、雷部の神として知られる鄧天君・辛天君・張天君・陶天君・龐天君・劉天君・荀天君・畢天君などは、実際の事蹟らしきものはほとんど伝えられない。馬元帥・趙元帥・殷元帥、それに王靈官などは、どの朝代の人物であったかなどが若干語られるものの、事蹟らしきものはほとんど見えない。後の『三教源流搜神大全』(3)になると、元帥神に関する故事が詳細に語られるようになるが、その多くは後に民間で発達した説話である。

さて、地祇・酆都系の法術で中心になるのは、温元帥・張元帥・関元帥といった神である。温元帥は、名を温瓊といい、狼牙棒と輪を持つ勇猛な姿で知られる。張元帥は、唐の安祿山の乱の時に忠義のために奮闘した有名な張巡である。この張巡と共に戦った許遠もまた元帥神とされる。また関元帥は、三国時代の猛将関羽のことである。後に関聖帝君として広く信仰されるようになる神で、赤兔馬に乗り、青龍刀を携えるという姿が有名である(4)。

ところで地祇・酆都系に配されている元帥は、関羽・張巡・許遠といった史上に有名な武人が多い。また彼らはいずれも忠義の将であり、志半ばにして没している。どちらかと言えば厲鬼、すなわち怨霊としての性格が強い。事実、関元帥などは唐代においては「関三郎」として広く恐れられていたものである(5)。

むろん元帥神自体、それまでの道教における武神とは異なる性格を持つものである。その形象も、三ツ目であったり、三頭六臂であったり、風輪や火輪に乗ったり、異形の神であると言える。驅邪や護法の任にあるため、武器を持った憤怒の相を持つものが多い。恐らくは密教の明王などの護法神の影響を受けて成立したものであろう。ただそれらの元帥神の中でも、関元帥や張元帥の性格は際だっている。

先に見た『真靈位業図』では、曹操や劉備などの三国時代の著名な人物の名が多く見られるのに対し、かえって関羽の名が無い。むろん『真靈位業図』の第七位に見られる神は、実際の信仰とはほとんど関連が無いものと思われるが、このことは少なくとも、六朝期における関羽の知名度がかなり低いことを示すものとは言えよう。

地獄に関わる神が驅邪の力を持つ、ということについては、これも六朝期の『真誥』(6)の「北帝 煞鬼之法」などに見えている。

世人有知酆都六天宮門名、則百鬼不敢爲害。欲臥時、常先向北、祝之三過、微其音也。祝曰、吾是太上弟子、下統六天。六天之宮、是吾所部、不但所部、乃太上之所主。吾知六天門名、是故長生、敢有犯者、太上斬汝形。(略)此所謂北帝之神祝、煞鬼之良法。鬼三被此法、皆自死矣。

ここでいう北帝とは、『真靈位業図』の酆都北陰大帝のことであると思われる。但し、幾つかの道教経典では、北帝は北極紫微大帝のことであるとも、またこの両者を合わせた「北陰 酆都紫微大帝」であるとも解される。後に驅邪の神としては、天蓬元帥・天猷元帥・真武真君・翊聖真君の所謂「北極四聖」が著名な存在となり、北宋期には代表的な神将とみなされるようになる。

真武からさらに発展した玄天上帝にも、冥界神としての一面がある。もっとも、これはそもそも紫微大帝や玄天上帝が北帝の性格を受け継いでいることから派生した現象であると考えられる。さらに冥界の主宰神としては、泰山の神である東嶽大帝がより明確な地位を有するようになると考えられる。

一方で、『道法会元』になると、驅邪の神将の数や役割は増加し、例えば雷声普化天尊と雷部の諸天君、紫微大帝と北極四聖などといった様々な組み合わせが試みられることになる。

2. 地祇法・酆都法の由来

さて『道法会元』の地祇・酆都系の法術と思われるものは、およそ次のようなものである。

- 卷二百五十三 地祇法
- 卷二百五十四 東嶽温太保考召秘法
- 卷二百五十五 地祇温元帥大法
- 卷二百五十六 地祇温元帥大法
- 卷二百五十七 東平張元帥秘法
- 卷二百五十八 東平張元帥專司考召 法
- 卷二百五十九 地祇馘魔関元帥秘法
- 卷二百六十 酆都朗靈関元帥秘法
- 卷二百六十一 酆都車夏二帥秘法
- 卷二百六十二 酆都考召大法
- 卷二百六十三 酆都考召大法
- 卷二百六十四 北陰酆都太玄制魔黒律収摂邪巫法
- 卷二百六十五 北陰酆都太玄制魔黒 律靈書
- 卷二百六十六 北陰酆都太玄制魔黒 律靈書
- 卷二百六十七 泰玄酆都黒律儀格
- 卷二百六十八 泰玄酆都黒律儀格

これ以外にも『道法会元』には、卷三十六に「地祇上将陰雷大法」などがある。

酆都法と地祇法の関係はかなり密接であったと思われる。横手裕氏の指摘によれば、地祇法はまた「小酆都」と呼ばれ、また酆都派は別名「酆嶽」派とも称されることがあった(7)。この「嶽」とはすなわち「東嶽」のことであり、つまりは地祇法を指すものと考えられる。またこの『道法会元』の配列を見ても、「地祇馘魔関元帥秘法」と「酆都朗靈関元帥秘法」が同じ関元帥の法術として扱われている。恐らく酆都法と地祇法はほとんど同じものと見なしても問題はないであろう。

南宋の道士である白玉蟾は、『海瓊白真人語録』(8)の中で次のように述べている。

真師曰、古無鄧都法。唐末有大円吳先生始伝此法於世、以考召鬼神。其法中只有法有八将三符四呪法、及有鄧都総録院印。後人增益、不勝繁絮似此之類、安有正法。

すなわち、白玉蟾は「いにしえには鄧都法無し」と断言している。またさらに、鄧都法の幾つかは「後人が増やしたものであろう」と指摘する。実際に南宋のこの時期においては、天心派や浄明派、それに神霄派から派生した様々な流派、例えば八卦洞神・南宮火府・太乙雷法・金火天丁・九州社令などの諸派が、それぞれ法術と神将を発展させていた様子が、『道法会元』や『法海遺珠』の記載から推察される。唐末にこの法が起こったとすることには不明な点もあるが、南宋期に鄧都法が存在したことは、この記事から見ても間違いないと思われる。

また『道法会元』卷二百五十三「地祇法」の序には、地祇法がどのように伝えられたかについてやや詳しく述べられている(9)。

地祇一法、凡数十階、温將軍専司、亦十余本、使学者莫之適従。余初得之盛仙官椿、繼得之李真君守道、再得之於六陰洞微盧仙卿堃、所授之本已大不同。繼而遇時真官、則符篆愈異。晚参之間判官天佑、及伝之呂真官希真、玄奥始全備矣。呂以道法、自青城而來江浙、名動一時、凡祈晴禱雨、伐廟馘邪、莫非用此呂之法書、悉要而簡。

これを書いたのは南宋期の神霄派において活躍した劉玉である。劉玉は字を清卿といい、徐必大や盧堃を師とし、多くの法術を伝えた。地祇法の他には、金火天丁法の伝授に関わっている。

さらに続いて「地祇諸余論」があり、その中では次のように述べる。

地祇一司之法、実起教於虚靖天師、次顕化於天宝洞主王宗敬真官、青城吳道顕真官、青州柳伯奇仙官、果州威恵鐘明真人、相繼而為宗師。其後如江浙閩蜀湖広嗣法者、何限姓名昭福寧幾人。其書始則有石碑本、繼則有鉄林府地祇、原公夫人廟地祇、五雷地祇、五虎地祇、索子地祇、十字地祇、四凶地祇、聖府地祇。後則有蘇道濟派、温州正派、李蓬頭派、過曜卿派、玄靈続派。如此等類、数之不尽千蹊万径、源析支分。

これらによれば、地祇法はすなわち第三十代張天師とされる張虚靖から伝えられたもので、王宗敬・吳道顕・柳伯奇などが宗師となり、伝授せられた。しかしその後数多くの支派が出現し、「鉄林府地祇・原公夫人廟地祇・五雷地祇・五虎地祇・索子地祇・十字地祇・四凶地祇・聖府地祇」などの諸派が

独自に法を伝えていた。劉玉は、盛椿・李守道・盧埜・時真官・聞天佑・呂希真などの諸師から伝を受けて、ようやくその完全な法術を得たとする。この法術は、その後弟子である黄公瑾に伝わった。

また「地祇馘魔関元帥秘法」に付す「事実」においては、やはり張虚靖との密接な関連を伺わせる記載がある。

昔三十代天師、虚靖真君於崇寧年間奉詔旨云、万里召卿、因塩池被蛟作孽、卿能与朕凶之乎。於是、真君即篆符文行香、至東嶽廊下、見関羽像、問左右。此是何神。弟子答曰、是漢将関羽、此神忠義之神。(略)即時風雲四起、雷電交轟、斬蛟首於池上。

すなわち、関元帥の故事として有名な、解州における蛟退治の話である。この故事は、その後敷衍されて『三教搜神大全』『宣和遺事』に採録されており、また『関雲長大破蚩尤』などの雑劇にもなっている。ここでは、関元帥は蛟と化した蚩尤を退治したことになっている。

この「事実」は徽宗の頃の人と伝えられる陳希微が書いたものとされる。ここでは退治されるのは蚩尤ではなく、単なる蛟であり、またその言辞も素朴で、最もこの故事の原形に近いものかとも推察される。ただ、この記事は幾つかの点で不可解である。まず、張虚靖は関羽のことを全く知らず、左右の者に聴いて始めてその神像が何であるか分かったというのである。またこれによれば、関羽は東嶽大帝の配下の神と考えられていたようである。むろん『道法会元』の記載などでは、関元帥の称号は「酆都馘魔元帥」であり、東嶽大帝の部下としても問題は無いが、他の資料には東嶽との関連性のある記載に乏しい。

ただこれらの幾つかの記載から、酆都法や地祇法が張虚靖を「祖師」とするものと考えられていたことは分かるであろう。

3. 張虚靖と雷法

張虚靖は歴代張天師の中でも特に著名な人物であり、法術に長けていたとされる。その名は継先、虚靖はその号である。第二十九代天師の子というわけではなく、傍流から出て天師位を継いでいる。年若くして知られ、三十六歳にして没している。

張虚靖の故事として最も知られているのは、先に見た解州の蛟退治と、『水滸伝』の冒頭に見られる物語であろう。ここでは、瘟疫を祓って欲しいとの帝の要請に応じて張虚靖は汴京に赴くが、その留守

の間に洪大尉によって百八の魔星が解き放たれてしまうことになっている。また『呪棗記』では薩真人に仙術を施す者として登場する。その逸話は多く、宋代を代表する道士とされるイメージについては別に論じた(10)。

ただ、林靈素に比べては、徽宗朝の道教そのものに対する影響は少ない。雷法との関連については、雷法の祖師として扱われるため、関連が深いとされる。拙著でも前にはそのように考えたが、はたして本当に雷法に深く関わったのか、それともあくまで劉玉らによって後から附会せられた伝承にすぎないのか、この点を『道法会元』などの資料から逆に遡って考える必要がある。

『道法会元』巻七十一には、「虚靖天師破妄章」が収録されている。ここに述べられているのは、内丹と雷法の融合を意識したものである。

以心合神 法即是心
 神可通天 呼天叱咤
 金光召雷 妄想行持
 真念降魔 心妄鬼欺
 祖炁陽精 弁真陰陽
 南昌非心 普度有法
 取炁不同 不識元神
 印須心印 靈光一点
 先天字号 妄想陰陽
 腎中一点 心下元神
 胆非雷府 誤指雷霆
 七事純陰 不弁真陽

ここに見える説は『明真破妄章頌』(11)とほぼ同じものであり、また『三十代天師張虚靖真君語録』(12)の巻一に収録される「心説」の論とよく似た面がある。これが張虚靖本人の言辞であるかどうかは簡単に判断できないが、かなりその思想を反映したものであると見なすことは可能だと思われる。

『道法会元』の中には、他にも張虚靖を祖師と位置づける法術が存在している。巻百九十五にある「混元一炁八卦洞神天医五雷大法」であり、そこでは紫微大帝・妙道自然上帝・玄天上帝とともに、張虚靖の名が挙げられている。

主法宗派(略)

祖師三十代天師元通弘悟真君張繼先(略)

将班

上清八卦洞神主法大元帥龐靈(略)

上清八卦洞神掌法副元帥劉通(略)

これはすなわち、神霄派の八卦洞神系の法術に属するものである。この法は青城山の張元真が中心になって伝えたもので、龐・劉・陶天君などの元帥を重視する。この巻百九十六に収録する「洞神後序」には、張虚靖の署名があるが、これは些か疑わしく、虚靖の言ではないと思われる。そこではこの法術に見られる二元帥と八将を、陰陽と八卦に結びつけているようだが、かなり浅薄な解釈である。

張虚靖をより法術の中心に据えるのは、やはり地祇・酆都系の法術においてである。まず『道法会元』巻二百五十五の「地祇温元帥大法」では、その主法と主帥を次のように記す。

主法

祖師三十代天師虚靖張真人 諱繼先

主帥

玉皇殿甫左亢金律令翊靈昭武顯德上将温元帥 諱瓊字子玉

さらに、この後に「虚靖天師訣」が続く。

東嶽幽陰出地祇 箇中玄妙少人知(略)

有符勘合令相隨 若然遇得明師旨

召生童一霎時 天上三十六 地下三 十六

若要温帥靈折破黄婆星

むろん、これも張虚靖の言であるとは考えにくい。この法術の中では、東嶽大帝と温元帥の関係、それから張虚靖の祖師としての地位が強調される。上奏文の中で温元帥を招請する時は東嶽・天蓬元帥と張虚靖の三者の名が書される。

祖師三十代天師虚靖宏悟真君張

祖師東嶽泰山天齊仁聖帝

祖師天蓬玉真寿元真君蒼天上帝

卷二百五十七「東平張元帥秘法」においては、何故か張虚靖は主法とは位置づけられてない。しかし卷二百五十八「東平張元帥專司考召法」では、虚靖を主法とする。

主法

祖師虚靖元通弘悟真君張繼先

將班

主將通天斬邪大將東平忠靖威烈元帥張巡(略)

副將溟泠五道將軍許遠(略)

聽令郎君小亭侯張応(略)

統兵先鋒大將雷万春(略)

助法顯靈大將南霽雲(略)

止哭大將張遼(略)

飛符捷疾功曹張果(略)

隨司十太保

温玉 李文真 鉄勝 劉仲 楊文貴 康応 張蘊 岳昊 孟雲 韋彦卿

このうち、張巡・許遠・雷万春・南霽雲は、いずれも『新唐書』の忠義伝中に伝が収録され、安史の乱の中で忠義のために戦った人物として知られる。東嶽大帝の部下として知られる十太保の神もここに名を連ねる。温玉とされるのは温元帥のことであろう。三国の武人張遼もここに加わるが、やはり忠義の將として知られている。

『道法会元』卷二百五十九「地祇馘魔関元帥秘法」では、主法を紫微大帝に据える法術がある一方で、「又一派」として幾つかの法術を加える。そこではやはり張虚靖が主法となっている。

主法

祖師三十代天師虚靖弘悟真君張 諱 繼先

将班

東嶽独体地祇義勇武安英濟関元帥 諱羽

ここでは、明確に関元帥が東嶽の配下として位置づけられており、地祇法の神将ということになっている。これは先に見た「事実」の記載と密接な関連を持つ。恐らくはむしろ「事実」の記載を受けて作為されたものであろう。ここでの関羽の号が「武安英濟」であることも、やや疑問を感じさせるものである。「義勇武安王」の称号は、既に北宋徽宗の時にあるが、これに「英濟」を加えるのは淳熙年間以降となるからである。

ただこの記載からは、少なくとも関羽はもともと東嶽の配下、すなわち冥界の将としての地位を早くから有していたと推察することができる。

卷二百六十「鄴都朗霊関元帥秘法」でも、主法は張虚靖であり、また神将としては関羽が中心となっている。

主法

祖師三十代天師虚靖張真君

将班

主将鄴都朗霊馘魔大将関元帥 諱羽

副将清源真君趙昊

飛天八将

韋錫 劉・ 楊鑑 孟鏗 車鑄 夏・ 劣鑪 桑銅

これも、恐らくは有名な解州の蛟退治での故事を踏まえたものであるとは考えられるが、幾つかの疑問点もある。例えば、二郎神の称号として有名な「清源真君」を有する趙昊という神将が存在していることである。一般に清源妙道真君として知られるのは趙昱である。或いは異伝承を伝えるものか。また鄴都八将が配下神として見られることも、重要であると考えられる。

この後に続く巻二百六十一の「鄴都車夏二帥秘法」、及び巻二百六十二「鄴都考召法」では、時に関羽の名が見えるものの、主要な神将とはなっていない。また 張虚靖に関する記載もほとんど見えなくなる。それに代わって大きな役割を果たしているのが、韋・劉・楊・孟・車・夏・劣・桑の八将である。「鄴都車夏二帥 秘法」はこのうちの車・夏の二元帥を中心にした法術である。

先に見た白玉蟾の言によれば、鄴都法では「ただ八将、三符、四呪の法があるだけであり、その他の法術は後から加えられたもの」であったとする。つまりこの言を信ずるならば、八将が中心となる法術の方が古いものであったはずである。実際、「鄴都考召法」の方がより古い法術の体系を反映しているように思える。

ところで、巻二百六十四「北陰鄴都太玄制魔黒律収撰邪巫法」や巻二百六十七「泰玄鄴都黒律儀格」には、徐必大・盧埜・鄭知微などの名が見える。盧埜は劉玉の師で、また地祇法を伝えた人物でもある。このことから考えるに、鄴都法と地祇法は別々の法術であったとしても、共に盧埜・劉玉を経て伝わっていることが分かる。そして劉玉などの主張するところによれば、これらの法術は張虚靖から伝わったものであるとされる。

恐らく鄴都法は、白玉蟾が指摘したように、元来は八将を中心とする法術であった可能性が高い。「鄴都考召法」や「北陰鄴都太玄制魔黒律収撰邪巫法」などに見える傾向は、これに合致するものである。そして「鄴都朗靈関元帥秘法」では、関元帥と八将の結合が行われているが、むしろこの形式は新しいのではないか。すなわち、張虚靖を主法とし、関元帥を中心とする法術は、後から付け加えられたものではないか推察されるのである。

結 語

『道法会元』に収録される法術については、むろん単純に判断できるものではなく、幾つもの編纂過程を経てきているものと考えられる。ただそれにしても、新 旧の層の相違は存在することが看取される。小論では張虚靖と鄴都法・地祇法に関する記載について見たが、『道法会元』の中でも張虚靖を主法とし温元帥・張元帥・関元帥などが帥将となる法術は、やや成立が遅い可能性があることを指摘した。さらに詳細に他の法術との関連を考察することは今後の課題としたい。

注

1. 『道法会元』(『正統道蔵』正一部 S.N.1220)、『法海遺珠』(『正統道蔵』太平部 S.N.1166)
 2. 陶弘景『洞玄靈寶真靈位業図』(『正統道蔵』洞真部 S.N.167)
 3. ここでは『絵図三教源流搜神大全(外二種)』(上海古籍出版社・1990年)収録のものを使用した。
 4. これらの諸神の発展については、呂宗力・欒保群『中国民間諸神』(河北人民出版社・改訂版・2001年)を参照。
 5. 前掲『中国民間諸神』477頁。
 6. 陶弘景編『真誥』(『正統道蔵』太玄部 S.N.1016)
 7. 横手裕「白玉蟾と南宋江南道教」(『東方学報』京都第68冊・1996年)123～172頁。
 8. 『海瓊白真人語録』(『正統道蔵』正一部 S.N.1307)
 9. これについては、李遠国『神霄雷法』(四川人民出版社・2003年)98～99頁を参照した。
 10. 拙稿「[天師張虚 靖のイメージについて](#)」(『東洋大学中国学会会報』第7号・2000年)1～12頁照。
 11. 『明真破妄章頌』(『正統道蔵』洞神部讚頌類 S.N.979)
 12. 四十二代天師張宇初編『三十代天師張虚靖真君語録』(『正統道蔵』正一部 S.N.1249)
-